

『フランケンシュタイン』の天才論

小川公代 (ogawa.kimiyo@gmail.com)

【1】18 世紀の天才論、天才たち

- エドワード・ヤング (1683-1765) による「独創的詩作に関する考察」(1759)
- ウィリアム・ゴドウィン (1756-1836) 『政治的正義』(1793)、『ケイレブ・ウィリアムズ』(1794)
- メアリ・ウルストンクラフト (1759-1797) 『女性の権利の擁護』(1792)
- パーシー・ビッシュ・シェリー (1792-1822) 『西風のオード』(1819)、『鎖を解かれたプロメテウス』(1820)
- ヘンリー・フュースリー(1741-1825) 『夢魔』(1781 年)

【2】ジェンダーをめぐる問題

- 『フランケンシュタイン』『ヴァルパーガ』に登場する天才は性別が違う

科学者=天才／芸術家=天才？

- ルソーとウルストンクラフトのジェンダー論争 (『エミール』『女性の権利の擁護』)

「女性の教育はすべて男性に関連させて考えられなければならない。男性の気に入る、役に立ち、男性から愛され、尊敬され、男性が幼いときは育て、大きくなれば世話をやき、助言をあたえ、なぐさめ、生活を楽しく快いものにしてやる、こういうことがあらゆる時代における女性の義務であり、女性にこどものときから教えなければならないことだ。」(『エミール』(下) ルソー、今野一雄訳、p.21)

“As for Rousseau’s remarks, which have since been echoed by several writers, that they have naturally, that is, from their birth, independent of education, a fondness for dolls, dressing, and talking, they are so puerile as not to merit a serious refutation....that she will imitate her mother or aunts, and amuse herself by adorning her lifeless doll, as they do in dressing her, poor innocent babe! is undoubtedly a most natural consequence.” (Vindication of the Rights of Woman, p. 110-111)

“I have, probably, had an opportunity of observing more girls in their infancy than J.J.Rousseau—I can recollect my own feelings, and I have looked steadily around me;I will venture to affirm, that a girl,will always be a romp and the doll will never excite attention unless confinement allows her to alternative.” (p.112)

【3】電気と霊

- エラスムス・ダーウィン (1731-1802) 『ズーノミア』(Zoonomia, 1794)
- ジョンソン博士の定義 (電気)

Dr Johnson’s *Dictionary of the English Language* (1755)

A property in some bodies, whereby, when rubbed so as to grow warm, they draw little bits of paper, or such

like substances, to them. *Quincy*.

Such was the account given a few years ago of electricity; but the industry of the present age, first excited by the experiments of *Gray*, has discovered in electricity a multitude of philosophical wonders.

“[T]he living principle of nerves has an irritability belonging to it resembling that of muscles, and capable of causing a contraction in them when they are divided.” (John Abernethy)

【4】観相学と骨相学

観相学 (physiognomy)

ヨハン・カスパー・ラヴァーター (1741-1801)

骨相学 (phrenology)

フランツ・ジョセフ・ガル(1758-1828)とヨハン・ガスパー・スプルツハイム (1776-1832)

「人間は偶発的な外界からの感覚印象も、身体内部の臓器の存在に対しても、少しの影響を与えることができないのだ。それどころか、ある臓器に刺激が与えられれば、その影響を感じざるを得ないのである。人間はこの影響力の司令塔になることはなく、責任を負うことすらできないのだ」(拙訳)

J.G. Spurzheim, M.D. *Outlines of the Physiognomical System or Drs. Gall and Spurzheim: Indicating the Dispositions and Manifestations of The Mind*. Printed for Baldwin, Cradock, and Joy: London, 1815), 295.

参考論文

【以下は、小川先生が近刊される書籍の一章になります。学術的なご利用にあたりましては、当サイトの確認をお取りください】

『フランケンシュタイン』の天才論



「メアリー・シェリーの肖像画」(1840 年, リチャード・ロスウエル画)
(Wikimedia Commons より)ⁱ

イギリス文学を研究する者にとって《天才論》といえば、エドワード・ヤング(1683-1765)による「独創的詩作に関する考察」(1759)であろう。独創性、つまりオリジナリティが天才(*genius*)という言葉と結びつくようになったロマン主義時代の先駆けとして広く読まれるようになった古典である。ヤングは「独創者(*originals*)」あるいは天才を、植物のように自然にぐんぐん「育っていく」ように作品を創造する人であると考え、他人の作品を借りて、苦勞して製造する「模倣者」とは異なると主張する。ⁱⁱ つまり、天才は自己のなかから湧き上がる力を持っているのである。

メアリー・シェリー(1797-1851)の『フランケンシュタイン』(1818)を、19 世紀初頭の医科学言説が如実に映し出された小説であると評する研究は多い。もちろん、それに対して反論の余地はないが、医学的観点からこの小説における天才、あるいは天才の起源に関する研究は長らく看過されてきた。まだ赤ん坊だったシェリーの性質―天才かどうか―を診断してもらうため、父ウィリアム・ゴドウィン(1756-1836)が友人ウィリアム・ニコルソン(1753-1815)に観相学の分析を依頼したという逸話もあり、ゴドウィン家にこの唯物論的な方法論が浸透していたことがよくわかる。

たしかに、フランス革命直後に上梓した『政治的正義』(1793)や翌年それをフィクション化した『ケイレブ・ウ

『イリアムズ』(1794)の著者ゴドウィンと、『女性の権利の擁護』(1792)を書いてイギリス社会に旋風を巻き起こしたメアリ・ウルストクラフト(1759-1797)の天才二人の間に生まれたメアリ・シェリーが天才でないはずはないという世間の大きな期待を彼女自身が感じていたことは間違いないだろう。成長して天才文筆家になることを囑望された彼女自身が、〈天才〉というテーマに挑んだとしても不思議はない。

医科学言説においては、生理学的な条件、あるいは身体的な特徴が人の内面や潜在能力を規定すると考えられていた。しかし、このようないわゆる〈唯物論〉は、まだキリスト教信仰が広く受け入れられていたメアリ・シェリーの時代には急進的な思想として忌避された。実際、彼女の夫でロマン派詩人だったパーシー・ビッシュ・シェリー(1792-1822)のかかりつけの医師ウィリアム・ローレンス(1783-1867)は「唯物主義者(materialist)」として槍玉に挙げられ、当時の紙面を賑わせた生命論争の渦中の人であった。ⁱⁱⁱ メアリ・シェリーも、ローレンスとジョン・アバネシー(1764-1831)との間で繰り広げられた医学論争を身近で聞いており、とりわけローレンスが主張した唯物論的な考え方が反社会的な思想であることもよく知っていた。

興味深いのは、メアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』にも、歴史ロマンス小説として知られる『ヴァルパーガ』(1823)にも、生命力漲る登場人物のまさにその力の起源が神秘的に描かれていることである。前者は、死体をかき集め、そこから美しい部位を選び出して縫い合わせ、人造人間を創り上げる天才科学者の物語としても読める。もちろん主人公ヴィクター・フランケンシュタインは、前人未到の科学的偉業を成し遂げる点において天才ではあるが、その後、彼の被造物によって次々と家族の死がもたらされることを踏まえると、悲劇的な宿命を背負った天才でもある。また、比喩的な暗示として、死体をかき集めて(他人の身体を借りて)新しい生命を誕生させるプロセスは、天才というより、ヤングのいう模倣者の印象だろうか。

フランケンシュタインの^{クリーチャー}被造物も、科学者ではないが〈天才〉である。フランケンシュタインに見捨てられてからしばらくは事態を把握することさえできなかったクリーチャーが、ドレイシー家から漏れ聞く対話からこっそり言葉の意味を学び、自分を創造した科学者の日記を理解するようになり、醜さゆえに見放されてしまった事実を知るのだ。彼は最終的に、ジョン・ミルトンによる『楽園喪失』(1658)や、ヨハン・ゲーテの『若きウェルテルの悩み』(1774)といった難解なテキストでさえ、すらすらと読み上げるようになる。『ヴァルパーガ』に登場する神に仕える巫女ベアトリーチェもクリーチャーと同じように悲劇の宿命を背負った天才である。二人のその豊かな感受性が彼らの靈感や思考の源でもある点で、比較考察する価値があると考ええる。

19世紀初頭は、人間の根本的な動力として〈霊〉以外に〈電気〉が科学的に証明されつつある時代であった。当時の生命論争といえば、チャールズ・ダーウィンの祖父エラスムス・ダーウィン(1731-1802)の唯物論的な科学言説が思い浮かぶ。さらに唯物論者として有名だったのは、今となっては疑似科学と称される観相学のヨハン・カスパー・ラヴァーター(1741-1801)、また、骨相学(phrenology)のフランツ・ジョセフ・ガル(1758-1828)とヨハン・ガスパー・スプルツハイム(1776-1832)らである。観相学も骨相学も、人間の性格や性質のルーツ、究極的には〈天才〉の兆候を身体や臓器から読み取ろうとする方法論だ。

このような唯物論が流行する中でも、メアリ・シェリーは、まだキリスト教信仰が根強く残っていた時代に生きていたことに留意しなければならない。たとえば、〈霊〉の影響といった宗教との葛藤も感じていたはずだ。この論考では、19世紀医科学言説における生命論争を中心に論じながらも、シェリーが科学と宗教の間を揺れつつ、『フランケンシュタイン』と『ヴァルパーガ』の二作品において、どのように天才の靈感について表象したのかについて考察したい。

1. 天才の^{インスピレーション} 靈感

『フランケンシュタイン』に登場するクリーチャーが天才であるとして、彼は果たしてどのように誕生したのか。天才の「^{インスピレーション}靈感」というテーマは間違いなくロマン主義思想の中核にある。そして、その靈感は、当時大流行した〈宗教〉と〈科学〉の対立が表面化した生命論争と無関係ではない。その19世紀生命論争といえば、エラスムス・ダーウィンの影響について言及しなければならないだろう。



「エラスムス・ダーウィンの肖像」(1770, ジョセフ・ライト画)
(Wikimedia Commons より)^{iv}

以下は、1831年版『フランケンシュタイン』の序文からの引用である。

バイロン卿と〔パーシー〕シェリーの間で多くの会話が長い時間交わされました。私は熱心に聞き入っていましたが、ほとんど静かにしていました。ある会話ではありとあらゆる学説が論じられ、別の会話では生命原理の性質について、はたしてそれは発見して伝えることができるのかが論じられました。二人はダーウィン博士の話をしました。……博士はヴァーミセリの欠片を硝子ケースに保存しましたが、やがてなんらかしらの驚くべき方法が用いられて、その欠片が自発的に動き始めたのです。^v

メアリ・シェリーは、ダーウィンが「なんらかしらの驚くべき方法(some extraordinary means)」によって生命を吹き込んだと理解している。広くロマン主義作家らの間で読まれた彼の医学書『ズーノミア』(1794)の科学至上主義の例を一つ挙げるなら、動物電気というものの存在を提唱したガルヴァニズム(Galvanism)の応用がある。^{vi} イタリアの医師・科学者ガルヴァーニ(1737-1798)のカエルの脚の電気実験はあまりに有名だが、エラスムス・ダーウィンも同様の実験をしていたことはそれほど広く知られていない。つまり、「この驚くべき方法」が〈電気〉であったことはほぼ間違いない。



「ルイージ・ガルヴァーニの実験」
(Wikimedia Commons より)^{vii}

電気を生命原理の一つとみなす唯物論的アプローチが『フランケンシュタイン』にも見られることを踏まえて、この小説を「不可能を可能にした科学についての物語であり、超自然的な存在としての怪物の話ではない」と主張する批評家もいる。^{viii} しかし、このような見方は、19 世紀初頭に大きな論争を呼んだ、〈科学〉と〈宗教〉が互いに侵食しあう言語空間—たとえば、物質に浸透する「霊」(spirit)という表現—を軽視していると言えるだろう。なぜなら、当時の科学者たちにとって、〈科学〉と〈宗教〉は必ずしも対立する関係にあったわけではないからだ。^{ix}

つまり、ロマン主義時代における「霊」という考え方は必ずしも宗教用語としてのみ解釈されるべきではなく、学問の探求において適度な自由度を与えるような両義性を帯びていた。このような語彙の使用は、唯物主義者かスピリチュアリストかといった分類化をも拒む自由な語彙の使用を可能にしたといつてよい。これと同じことがメアリ・シェリー自身の思想にも当てはまる。

もちろん、エラスムス・ダーウィンだけがロマン主義作家の間で唯物論者と認識されていたわけではない。『フランケンシュタイン』が誕生した時代背景には、身体などの物質的、構造的な要素が人間の精神、あるいは性格を決定すると考えた骨相学がある。脳(臓器)が重要視されたこともあり「臓器学」(organology)と呼ばれることもあるため、究極の唯物論とも考えられる。しかし、ガルとスプルツハイムの唯物論的な議論には、皮肉にも実は神という宗教的な概念が中心にあるのだ。

この時代の天才論を理解するために重要なことは、身体が精神に影響を与える〈唯物論〉と霊的な存在の影響を前提とする〈スピリチュアリズム〉の闘い合いのなかで、天才の起源が探求されるようになったということである。言い換えると、19 世紀の唯物思想の代表格ともいえる骨相学への関心の高まりは、その新しい科学言説を批判したジョン・アバネシーらが繰り広げた生命論争と深い関わりをもつ。この論争において、アバネシーは、生命の源を身体に混入される〈不可視〉の霊的存在であると強く主張するのである。

唯物論を批判した医師ジョン・ハンター(1728-1793)に追随したアバネシーでさえ、「生命の原理」がこの非物質的な性質をもつと言いながら、これに矛盾するような考えも提示している。たとえば、エラスムス・ダーウィンの著書に触れて、「刺激が与えられる結果として・・・神経繊維が生じさせる運動を感覚とみなす」ことは近代の医学の「進歩(improvement)」であるという。^x ロンドンにあるイングランド王立外科医師会の会長でもあったアバネシーは、当時の最先端の医学の知識を持ち合わせていながら、他方で、生命の起源説については、宗教的な議論を避けるため慎重を期した。

このような論争がメアリ・シェリーにインスピレーションを与えたのはいうまでもない。人間の身体には〈霊〉が

混入されているのか、あるいは、臓器、筋肉、血管などの生理学的な機能によって精神が動かされるのか。このような問いのひとつの回答として読めるのが、フランケンシュタインの「生氣／火花(spark)」という言葉の用い方である。彼が「生命のない死体に生氣を注入することができる(I might infuse a *spark* of being into the lifeless thing)」(Shelley 38)と、生命原理が表現されるとき、はたしてメアリ・シェリーは魂の「生氣」と、電気の「火花」のどちらを想定していたのだろうか。この問題は天才の起源を探る上でも重要である。

2. 天才の起源としての火花／生氣

ヴィクター・フランケンシュタインの創造場面で、「火花／生氣」という両義的な言葉(spark)が用いられる背景には、ガルヴァーニなどによる科学実験と連関性があった。しかも、このような実験は科学者だけの特権というわけでもなかった。当時、ロンドン、グラスゴー、パリなどで行われた科学の講義はかなりの人数の聴衆を対象としており、唯物理論、精神医学、生物学などにおける物質(あるいは身体)の役割などについてもわかりやすく説明がなされた。^{xi} このような講義を、メアリ・シェリーも聴講したと言われている。『フランケンシュタイン』を書き上げた彼女のバースの滞在先のすぐ近くにキングストン講義室があった。そこで、ウィルキンソン博士が、電気がいずれ生命の宿っていない身体を蘇らせるのに用いられるだろうと予言している。シェリーもおそらくこの講義を聴講したのではないか。^{xii}

クリーチャーの生命の起源をめぐる問いが重要なのは、彼がフランケンシュタインに見捨てられてから、言語能力を飛躍的に伸ばすという才能を開花させるからである。ミルトンやゲーテを雄弁に読み上げるだけでなく、このテキストに象徴される意味を解釈するまでに成長した。果たして、クリーチャーの生命の起源は電気の「火花」であろうか、あるいは霊の「生氣」であろうか。これはクリーチャーを生み出したフランケンシュタインの幼少期から大学生に至るまでの教育を見ればよくわかる。実は彼は「雷(thunder and lightening)」に遭遇することによって(24)、幼少期から親しんできた錬金術から一旦離れ、「近代の科学システム(a modern system of science)」の中心に位置づけられた電気へと関心をシフトさせた。^{xiii} しかし父親には「くだらないもの(trash)」(23)と一掃された錬金術への関心を完全になくしたわけではなかった。

フランケンシュタインが「幽霊や悪魔を召喚する」物語は彼が熱心に追い求めたものであった(24)。ドイツのインゴルシュタットの大学で科学について学び始めた彼は、ケンプ博士という人物に出会う。中世の古い著書に描かれた超自然を軽蔑したケンプ博士とは対比的に(29)、錬金術も最先端の科学的知識も両方好んで読んだウォールドマン博士の教えを頼ることとなる。ここに来て、メアリ・シェリーは「電気」だけを生命原理として考えていたわけではないことが理解できるのである。ダーウィンと並んで生命科学と電気について当時名前が知られていたのは、ハンフリー・デイヴィーである。1808年(8月号)発行の『マンスリー・マガジン』では、彼が行なったガルヴァーニの電気実験に関する記事が掲載されているほどである。^{xiv} デイヴィーはさらに「化学(chemistry)」を新しい科学分野として確立しつつあり、当時もてはやされていた〈電気〉と〈化学〉を組み合わせる生命原理を考えていた。ウォールドマン博士は、デイヴィーによって周知されたこの「化学」を、自然科学の中でも最も進歩した分野であると説明しつつも(31)、霊や悪魔の存在も完全に否定していない。つまり、ウォールドマン博士に共鳴する主人公フランケンシュタインは、ダーウィンとデイヴィーを複合的に組み合わせた最先端の知識を駆使し、さらには中世の科学錬金術にも惹かれていた点を

加味すると、いわゆる新旧折衷タイプの科学者を体現しているということになる。

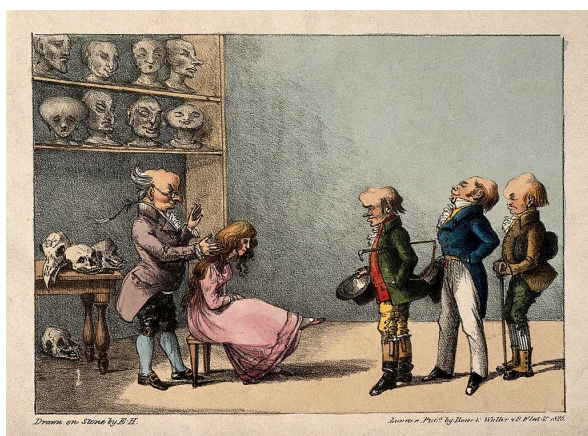
フランケンシュタインの「霊 (spirit)」という言葉が最も唯物論的に用いられるのが、「生命原理の霊 (spirit of animation)」という文脈であろう。この言葉はもともとエラスムス・ダーウィンが電気をもつ「治癒の効果」に注目しつつ、いずれ「生命の液体を抽出できる」方法論に辿りつくだろうと期待する際に何度も繰り返し用いられている (64-66)。興味深いのは、世間で散々唯物論者として批判対象になっていたダーウィンが、実は「生命原理の霊」を物質というよりむしろ「聖なる火」とみなしている点だ。最終的には、この「霊」を「中間的なエイジェンシーの影響」として捉え直している。究極的にこのエイジェンシーを「原因の原因」、つまり〈神〉を示唆する「偉大なる設計者 (the Great Architect)」まで辿っているのである。^{xv}

クリーチャーが死体と電気だけで創造されたのか、魂をもつ霊的存在なのかが揺れる両義性は、まさにローレンスとアバネシーの生命論争を彷彿とさせる。科学者フランケンシュタインがクリーチャーを「墓場から解き放たれた私の霊 (my own spirit let loose from the grave)」と呼ぶのである (57)。また、生命をもたない身体を継ぎ接ぎで創り、そこに「生命を注入する (infusing life into)」 (39) という表現も用いている。なにより、フランケンシュタインが最も力を入れるのは「それ (霊) を入れるフレーム」を創り出すことである (35)。スイスのディオダティ荘の怪奇談義でバイロン卿が提案したのは「幽霊物語」であったことを思い出せば、オカルトの要素が組み込まれていることに驚く必要はないのだ。

3. 『ヴァルパーガ』における天才表象

天才の起源が「霊」や「生氣」なのか、あるいは身体の「臓器」なのか、この問題はメアリ・シェリー自身の伝記的な逸話とも深く関係する。幼い頃から、ゴドウィンとウルストンクラフトの間に生まれた神童として注目を浴びていたメアリ・シェリーだけに、もし自分が「天才」であるなら、両親から授かった脳 (臓器) —現代の文脈でいうと遺伝子— にその因子が込められるはずと考えたに違いない。彼女の頭 (顔) を診断したニコルソンは、その特徴として「大きな額 (capacious forehead)」を挙げている。^{xvi} これは高い知性を持つ証であり、天才の兆候でもある。

ウルストンクラフトやゴドウィンの時代は、まだラヴァーターの観相学が流行っていた。つまり、人間の伸び伸びとした精神世界が可視化できる〈表れ〉として身体を観察する手法である。観相学は、たとえ生来的な身体や臓器の条件が悪くとも、エドワード・ヤングのいうように、精神が「植物」のように成長することは可能だと考えた。つまり、身体的変化はあくまで精神的変化の〈結果〉である。他方、ガルとスプルツハイムの骨相学は、生まれつきの身体的特徴によって道徳性を含む精神世界が規定されてしまうという前提がある。^{xvii}



「フランツ・ジョセフ・ガルが少女の頭を診断中」(1825 年, エドワード・ハル画)
(Wikimedia Commons より)^{xviii}

人間の性質は何によって決定づけられるのかという問いをスプルツハイムの骨相学を手掛かりに見ていくと、「[人間も動物も] 器官・臓器やその構成の本質は変えられない」という宿命論にたどり着く。そしてその前提が、神による創造なのだ。言い換えれば、物質（身体）の圧倒的な力の前には無力であり、人間には自由意志がないという論理である。

人間は偶発的な外界からの感覚印象も、身体内部の臓器の存在に対しても、少しの影響を与えられないのだ。それどころか、ある臓器に刺激が与えられれば、その影響を感じざるを得ないのである。人間はこの影響力の司令塔になることはなく、責任を負うことすらできないのだ。^{xix}

個人の精神があまねく事象の起源というわけではなく、「全てを知る創造主 (all-wise Creator)」(282-3) が、思考や動力の源であるとする考えが明確に提示されている。

このような決定論的なアプローチは、シェリーの小説『ヴァルパーガ』に如実に表れている。フランケンシュタインやクリーチャーのような天才として描かれているのは、主人公カストルッチョではなく、彼の愛人ベアトリーチェである。もちろん、英雄カストルッチョの少年時代、青年時代と彼に焦点が当てられて物語が進行する点においては歴史ロマンスの形態をとっている。彼の生まれはアンテルミネッリ家というルッカの名家で、対抗勢力であるゲルフの武力によって追放され、その結果、カストルッチョは復讐欲に燃えるようになる。政治的な執念をもち続ける彼は、幼馴染で婚約者ユーサネイジアとも、彼に身も心も捧げようとするベアトリーチェとも愛を成就させることはない。^{xx} カストルッチョは政治を優先し、ユーサネイジアは平和を優先するのだ。



「ベアトリーチェ・チェンチ (1577-1599) の肖像」(ガイド・レーニ)

(Wikimedia Commons より)^{xxi}

*メアリ・シェリーの『ヴァルパーガ』に描かれるベアトリーチェは、男性権力者の犠牲者として知られる「ベアトリーチェ・チェンチ」のイメージが重ねられている。

『ヴァルパーガ』は、カストルッチョをめぐるユーサネイジアとベアトリーチェの三角関係を描く複雑な物語でもある。ベアトリーチェは、神意をつかさどる巫女として政治的な力さえある天才である。彼女の天才の源泉は、その豊かな感受性である。「天の特別な介入によって突き動かされる衝動」によって、しばしばトランス状態になる。^{xxii} また、彼女の輝く目と赤く火照る頬は、「彼女を崇高にする霊／生氣 (spirit)」の表れであると表現されている。^{xxiii} カストルッチョに捨てられたベアトリーチェは身を隠し、ローマを目指して旅をする。その途中で、ユーサネイジアがベアトリーチェの存在を知ってしまうのだが、前者が後者に敵意を抱くことはない。それどころか、その境遇に共感し、ベアトリーチェの以下のような語りに耳を傾けるのである。

ご自分の胸の内をのぞいてみればいいのだわ。そして、もしあまりに穏やかだったら、代わりに私の心の内を見てみてください。私の内面をこじ開けて、貴女が見れるようにして差し上げてよ。悲観、憎しみ、悲しみは一切ありません。圧倒される威圧するような永遠の苦しみがあるのです。神が私を創造しました。私はその神の手によって創られし人間なののでしょうか。ああ、一体どんな霊 (spirit) が私のこの哀れな身体 (frame) に紛れ込んだのでしょうか…。^{xxiv}

ここで注目すべきは、神が身体 (frame) に注入した霊 (spirit) がベアトリーチェの運命を決定づけるという考え方である。「神」という言葉を用いているにもかかわらず、「霊」が反道徳的な起源を意味している点でスプリットハイムの影響が見られる。しかも、敵意や憎しみがカストルッチョにではなく、「病いの種を作り出した神 ([God] created the seeds of disease)」に対して向けられているのも重要であろう(342)。

クリーチャーが、ヴォルネーの『諸帝国の没落』(1791)を読んだ後で、人間の愚かしさを理解できずに苦しむ場面がある。「かつては権力を持ち、美德を湛え、素晴らしかった人間が、なぜそのように悪にまみれ、低俗になり下がるのか」(95)と悲嘆にくれる場面である。皮肉なことに、人間でない(少なくとも周りに人間として認知されない)クリーチャー自身がこの人間の愚かしさに自ら堕ちるのである。かつては美德を雄弁に語り、ドレイシー家の人々を貧困から救うべく力を貸したクリーチャーも、神によって悲劇の宿命を背負わされていたかのように、心を焼く憎しみに苦しめられるのである。彼はフランケンシュタインへの復讐心にすっかり支配され、罪なき人々を死に追いやってしまう。神から授かった肉体はすでに宿命づけられているという究極の唯物論がそこには垣間見えるのである。

むすび

メアリ・シェリー作品に共通するテーマは、〈天才〉の起源というより、まさに〈悪〉の起源ともいえる。彼女自身、自分が直面するさまざまな困難と、悲観的に物事を考えてしまう弱さについて友人への手紙で次のように説明している。

自分が他の人よりも弱い土（肉体）から創造されたのではないかと思うと（I am made of frailer clay）、スプルツハイムに共感します。^{xxv}

シェリーはなぜ決定論的な唯物論者であるスプルツハイムに共感したのか。理性主義者で、人間の自由意志の存在を信じていた彼女の両親でさえ、感情に流される人間の弱さを認めていた。おそらく、両親の〈理性〉への信頼を継承しようとしつつも、衝動の破壊性を回避できない人間の宿命、あるいは弱さを理解しようと努めていたのかもしれない。結局のところ、クリーチャーも「復讐欲」という自らの衝動に抗うことはできなかったし、なによりメアリ・シェリー自身も、既婚者であるパーシーとの愛からその身を引き剥がすことはできなかった。そういう意味において、感受性溢れるベアトリーチェによる愛の希求とクリーチャーによる愛の渴望は共鳴し合っている。

以上のことを踏まえると、ダーウィンの〈電気〉の唯物論というよりむしろ神に起源をもつ〈霊〉が肉体に宿るスプルツハイム的な宿命論がメアリ・シェリーの世界観に大きく影響していたことがわかる。スプルツハイムは、ゴドウィンのように自由意志を信じる思想家たちを根本から否定している。なぜなら、人間を「いかなる自然法からも独立しており、その自由意志だけが各人の行為の原因である」と規定する理性主義者にとって、そもそも「被造物（神に創られし者）」という概念自体が矛盾するからである（292-3）。このように、人間の自由意志を疑問に付したのはスプルツハイムであった。メアリ・シェリーが頻繁に用いた“spirit”という言葉は「火花」とも「霊」とも解釈しうるが、〈科学〉と〈宗教〉が互いに侵食し合うような言説空間では、流動的に、都合よく意味を変態させることで当時の歴史的文脈においてうまく機能していたともいえる。

『フランケンシュタイン』のクリーチャーが名を持たない被造物であったにもかかわらず、創造主にも我々読者にも「怪物」と形容されてしまう理由は、その得体の知れなさにあった。科学の産物なのか、あるいは知らない間に混入される得体の知れない〈霊〉なのか。メアリ・シェリーはこのような哲学的、宗教的な問いを、「自分の霊は祝福されているのだろうか」といった彼女自身の芸術家・天才としての問題に重ね合わせながら、登場人物の造形に苦心したに違いない。ロマン主義作家の間に浸透しつつあった自由で伸びやかな才能をもつ天才像に憧れを抱きながらも、彼女が『フランケンシュタイン』や『ヴァルパーガ』の中で描いた天才たちは、人間という被造物として生を受けたからには所詮自由は与えられないという悲観的な唯物思想を体現している。つまり、彼女は天才の伸びやかな感受性が孕む破壊的志向という究極の矛盾を示唆し、戒めてもいるのである。

ⁱhttps://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A1%E3%82%A2%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%82%B7%E3%82%A7%E3%83%AA%E3%83%BC#/media/File:Mary_Wollstonecraft_Shelley_Rothwell.tif

ⁱⁱ Edward Young, “Conjectures on Original Composition,” *Authorship: From Plato to the Postmodern*, ed. Sean Burke (Edinburgh: Edinburgh UP, 1995), 38.

ⁱⁱⁱ Kimiyo Ogawa, ““Suspended” Sense in *Alastor*: Shelley’s Musical Trope and Eighteenth-Century Medical

Discourse, in *The Figure of Music in Nineteenth-Century British Poetry*, ed. Phyllis Weliver, (Farnham, Ashgate: 2005), 56.

iv https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Erasmus_Darwin_-_Joseph_Wright_-_1770.jpg

v *Frankenstein or The Modern Prometheus, The 1818 Text*, (London: William Pickering, 1993), 179.

vi Erasmus Darwin devotes one section on “On Stimulus and Exertion” in his *Zoonomia. Zoonomia; Or, The Laws of Organic Life*, vol.1, (London, 1794), 62-100.

vii https://en.wikipedia.org/wiki/Luigi_Galvani#/media/File:Luigi_Galvani_Experiment.jpeg

viii J.A.V Chapple, *Science and Literature in the Nineteenth Century*, (London: Macmillan, 1986), 37.

ix Marilyn Butler, “Introduction” to *Frankenstein or The Modern Prometheus, The 1818 Text*, (London: William Pickering, 1993), xviii.

x John Abernethy, *An Enquiry into the Probability and Rationality of Mr Hunter’s “Theory of Life”*, (London: 1814), 71-72. Hereafter cited as *Enquiry* with page numbers in parentheses.

xi David M. Knight, *Natural Science Books in English 1600-1900*. (London, 1972), 128.

xii <https://bathnewseum.com/2018/02/28/its-electrifying/>

xiii 錬金術師のパラケルススやコーネリウス・アグリッパなどは、賢者の石（＝エリクサー）を用いて医療活動を行っていたといわれている。

xiv Richard Holmes, “Humphry Davy and the Chemical Moment,” *The Clinical Chemist* Vol.57, No.11, (2011), 1627.

xv Darwin, *Zoonomia*, 39, 64, 509.

xvi C. Kegan Paul, *William Godwin: His Friends and Contemporaries* (London, 1876), 289-90.

xvii これについては拙論「観相学から骨相学へー『フランケンシュタイン』における身体性」で論じたのでここでは簡単に触れるだけにします。『病いと身体 of 英米文学』（阪大英文学会叢書 1）玉井暲，仙葉豊編（東京、英宝社、2004 年）、180-200 頁。

xviii <https://wellcomecollection.org/works?query=V0011119&wellcomeImagesUrl=/indexplus/image/V0011119.html>

xix J.G. Spurzheim, M.D. *Outlines of the Physiognomical System or Drs. Gall and Spurzheim: Indicating the Dispositions and Manifestations of The Mind*. Printed for Baldwin, Cradock, and Joy: London, 1815), 295.

xx Shelley, *Valperga*, 230.

xxi <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%99%E3%82%A2%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%BC%E3%83%81%E3%82%A7%E3%83%BB%E3%83%81%E3%82%A7%E3%83%B3%E3%83%81#/media/File:Cenci.jpg>

xxii 1818 年からシェリー夫妻がイタリアへと旅し、メアリはベアトリーチェ・チェンチ（Beatrice Cenci）に関する資料のコピーを取り寄せ、イタリア語から英語に翻訳しながら語学の勉強をした。このことを考えても、実在したベアトリーチェへの関心も垣間見られる（Journals 211）。

xxiii Mary Shelley, *Valperga*, ed. Tilottama Rajan, (Peterborough: Broadview Press, 1998), 214

xxiv Shelley, *Valperga*, 342.

xxv A letter to Frances Wright, 30 December 1830. *Selected Letters of Mary Wollstonecraft Shelley*, ed. Betty T. Bennett, (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1995), 236.